

日本リスク研究学会
2016年11月27日
13:00-15:00(報告20分)

リスク心理から見たものさし

中谷内一也

同志社大学 心理学部

リスク認知研究の目的

Improving method for eliciting opinions about risk.

リスク認知研究の課題

To discover what people mean when they say that something is “risky.”

→ リスク認知研究は元々、心理的なリスクのもののさを明らかにしようとする営みであった。

- ・専門家のリスク評価からはみ出す要素に人びとは反応する
e.g., voluntariness, controllability, ...
- ・それら要素はバラバラにリスク認知に影響するのではなく、心理的にとりまとめられ、切り分けられる
- ・このアイデアを形にし、文化間でも再現性の高いモデルとしてまとめたのがSlovicと共同研究者達
→ リスク認知の2因子モデル

リスク認知の基本因子

恐ろしさ因子

致死的、世界規模の惨事をもたらす潜在力、制御困難、将来世代への悪影響の懸念、さらされ方が不平等、非自発的にさらされる

未知性因子

晩発的影響、外部から観察困難、本人にも感知不可、なじみが薄い、科学的によく分かっていない、新しい

- ・BSE問題の際、専門的リスク評価が低くても牛肉回避。なぜか？
- ・原発のリスクが高く認知されるのはなぜか？
- ・自転車のリスクが低く認知されるのはなぜか？

一般に、ものさしを利用する際に求められること

→ 妥当性と信頼性

リスク認知研究の知見が示唆すること

→ 直感的、感覚的な要素によって、客観的には同じ被害でも評価が変化してしまう

→ 客観的被害程度を基準にすると主観的評価はものさしとして必須の信頼性が＜系統的に＞怪しい

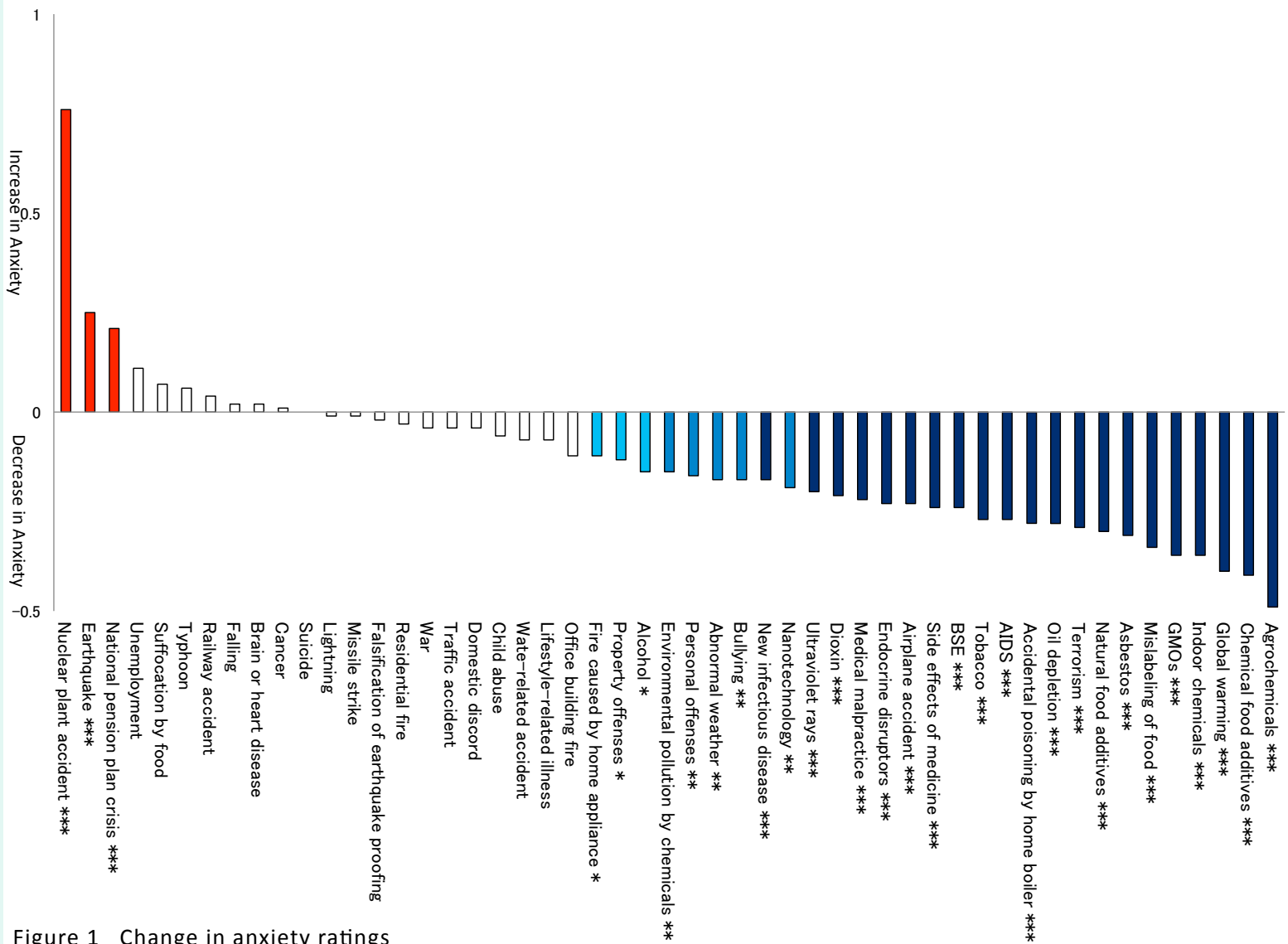


Figure 1 Change in anxiety ratings

Nakayachi, et al. (2014) JRRより, さらに続きはNakayachi & Nagaya (2016) IJERPH

そこで;

技術的リスク評価研究 → 感覚を排除した手法の開発

リスクの心理学研究 → 感覚的評価の系統性の探究

しかし、人には理性があり、論理的に熟考することもできる

二重過程理論(多数のバリエーションあり)

人には異なる2つの思考のシステムが備わる

経験的システム(システム1)	分析的システム(システム2)
全体論的	分析的
快不快の感情を基盤とする	理性、論理を基盤とする
連想による事象の関連づけ	論理的評価による事象の関連づけ
過去経験の感触を元に行動	対象への意識された評価に基づき行動
具体的なイメージや暗喩、 特定個人の物語から現実を構成する	抽象的な表象や言語、 数値により現実を構成する
即座行動へのすばやい情報処理	後の行動のための丁寧な情報処理
自己確証的正当化: 自分の経験を信じる	証拠と論理に基づく正当性を求める

経験的システム(システム1)と分析的システム(システム2)
のどちらが優勢か？

→ 私たちの日常的な判断や行為決定では経験的システムが
優勢

(それどころか、分析的システムは経験的システムの下僕)

Haidtの“象と象使い”の比喻

人類は長い進化の歴史をすばやい行為選択を要する狩猟採
集を行いながら、システム1に依ってサバイバルしてきた

ここで、技術的なリスク概念を再考しよう

“100mSvの被ばくで1,000人中5人が余剰にガン死と推定”

- ・専門家はモデルと統計データに基づいてリスク評価
～ そこでは、感情や特定個人を捨象した一般性が重要
- ・リスク評価は(専門家の)分析的システムによって生み出され、
(受け手の)分析的システムによって理解されると、期待される
- ・ところが、市民の日常的判断や行動においては経験的システムの影響力が優勢
- ・しかも、両システムあるからこそ厄介

このため、専門家のものさしに沿ったリスク評価は理解されても影響が小さい

では、どうすればよいのか？

→ どうしようもない。人間はそういうふうに行っている

ただし；

二重過程理論は“経験的システム（システム1）しかない”
と
いっているわけではない。分析的システム（システム2）と二
重の過程であるということが肝心

確かに、即時的な影響をもたらすのはシステム1であり、そ
れに響く情報提供かもしれない

しかし、重要で長期的な影響の絡む意思決定にはシステム
2の役割が大きいという知見もある

“いま・ここ”原理を越えられることは、人間の顕著な特徴

結論

民主主義社会でリスクを扱うなら;

- ・人は経験的システムから自由にはなり得ないこと
- ・直感的リスク認知を構成するものさしの性質を理解し、それらに配慮すべし

しかし;

- ・論理は通用しない
- と侮るべからず
分析的システムが構成するものさしに叩かれる

どうもありがとうございました